

第13回 第2章 武家社会の形成と生活文化のめばえ

モンゴル襲来と社会の変貌

執筆・講師
楠木 武

学習のねらい

中国大陸ではモンゴルが世界史上空前の大帝国を築き、その支配拡大の波は日本にも押し寄せる。この出来事は、日本の社会にどのような影響を与えたのだろうか。また同じころ、農業や商品流通、貨幣経済が発達をみせる。こうした変化の中、困窮する御家人が続出し、鎌倉幕府への不満も高まっていく。なぜこのような事態が発生したのか、考えてみよう。

モンゴル襲来

13世紀、ユーラシアに大帝国を築いたモンゴルは、朝鮮半島の高麗にも侵攻した。高麗は30年近い抵抗ののちに降伏したが、その後も三別抄（高麗の精鋭軍）の反乱がおきるなど、民衆の抵抗は続いた。モンゴルは大越（ベトナム）にも3回にわたって侵攻した。5代目の皇帝フビライ・ハンは、国号を中国風の元に改め、中国の南半分を支配する南宋の征服をおしすすめる一方、日本にも朝貢を求める国書を送ってきた。

これに対し、鎌倉幕府の8代執権北条時宗は返書を送らないことを決め、西国の御家人たちにモンゴルの襲来に備えるよう命令した。フビライは1274年、元・高麗の連合軍3万を日本に送った。短弓を乱射し、火薬を使った「てつほう」を炸裂させるモンゴル軍の集団戦法に対して、幕府軍は苦戦を強いられた。博多は占領され、幕府軍は大宰府まで退却したが、モンゴル軍は軍船に引き上げ撤兵した。この戦いを文永の役という。

翌1275年もフビライは国書を送ってきたが、時宗は使者を処刑し、再度の襲来に備えた。九州北部沿岸などを警備する異国警固番役を強化し、博多湾沿岸に石塁（防塁）を築いた。また、荘園領主にしたがる武士（非御家人）たちも幕府の指揮下においた。ついに南宋を滅ぼしたフビライは、1281年に14万の大軍を日本に派兵した。しかし、上陸が阻止されている間に暴風雨がおそい、海上のモンゴル軍の多くが溺死した。この戦いを弘安の役という。文永・弘安の2度のモンゴル襲来を元寇ともいう。

農業と商品流通の発達

武士が所領経営に力をいれたため、この時代は農業技術が進歩した。刈敷や草木灰などの肥料が用いられるようになり、鉄製の農耕具や牛馬耕も発達した。畿内や西日本一帯では、二毛

作も行われた。灯油の原料となる荏胡麻が栽培され、生糸や麻糸をつくって布が織られた。鍛冶や鋳物師、紺屋といった手工業者もあらわれた。農業や手工業が発達すると、生産物が商品として売買されて、商業も発達した。荘園の中心地や交通の要地、寺社の門前などでは、月に三度の定期市（三斎市）も珍しくなくなった。

商業の発達は、貨幣経済の浸透につながった。年貢の納入や商取引には、中国から輸入される宋銭が利用されることが多くなった。これにともない、遠隔地間での決済には、金銭の輸送を手形で代用する為替（かわせ）が使われるようになった。また、金を貸して利子をとる専門の金融業者である借上も出現した。

御家人社会の変化

モンゴルは3度目の日本遠征も計画したが、中国民衆の反乱やベトナムの抵抗などによってこれを断念した。しかし、日本ではいつ来るかもしれないモンゴルの脅威を感じ続け、異国警固番役なども継続されたため、御家人の負担は重かった。また、モンゴル襲来で多大な犠牲を払ったにもかかわらず、十分な恩賞が与えられなかったため、御家人たちは幕府への信頼をなくしていった。

一方、御家人の所領は分割相続によって細分化され、貨幣経済にまきこまれて支出もかさんだため、所領を質入れしたり売却する者が増えてきた。そこで1297年、幕府は徳政令を發布して、所領を無償で御家人にかえすよう命じた（永仁の徳政令）。しかし、この施策はかえって経済を混乱させることとなった。

モンゴルの脅威への対処などを通じて、幕府内では北条氏の本家である得宗の力が格段に強くなった。得宗家の家臣（御内人）が幕府の政治を動かすようになると、御家人の不満が高まった。同じころ、荘園領主に敵対して「悪党」とよばれ、訴えられる人々が激増する。軍事警察担当である幕府はこの「悪党」を鎮圧する役割を担うが、それは幕府に対する不満を増幅させることにつながった。